

飛鳥池遺跡出土刀装具について

はじめに 奈良県明日香村の飛鳥池遺跡は7世紀後葉を中心に操業した官営工房である。人字形の谷沿いに展開した工房と廃棄物層からは、莫大な金属製品、ガラス製品、木製品、生産関係品、木簡、土器などが出土した。製品には日本最初の鑄造貨幣である富本銭をはじめ、青銅製帯金具など国家が直接生産に関与したことを示唆する遺物が含まれる。

また、青銅製品にはいくつかの刀装具が含まれている。6～7世紀の装飾付大刀をめぐって、おもに環頭大刀、頭椎大刀、円頭・圭頭大刀の消滅と、方頭大刀の出現年代について論争が続いている。飛鳥池遺跡で出土した刀装具はその論争にも一定の影響を与えると思われるので、本稿で詳述したい。なお、方頭大刀の部分名称は図49に示す。

刀装具と考えられる遺物には鳩目金具2点、責金具2点以上、鑲付足金具1点、倒卵形銅板1点、露金具1点があり、すべて銅製である。このうち鑲付足金具は隣接する飛鳥池東方遺跡から出土した。以下で各遺物について詳述する。

鳩目金具 鳩目金具は把頭の中心付近にあけられた穴に両側から差し込む円筒状の金具である。1は最大径1.5cm、高さ0.95cm。片側がややすぼまり、もう一方の端部を外側に折り曲げる。内外面に黒漆が付着する。

2は最大径1.67cm、高さ1.55cm。側面に銅板を折り曲げて接合した線が明瞭に見える。一方の端部は丸く折り返す。鳩目金具は2個1対で使用されるが、両者の径は異なることから、本来は別個体の大刀に使用されたものと考えられる。

責金具 責金具は木製把や鞘を固定するために使われる環状の金具である。3はもっとも残りの良い完形品。長径3.8cm、短径2.4cmを測り、ふくらみの大きい側が佩表

に相当する。佩表側の刃部寄りに環の継ぎ目が残る。断面形は扁平な二等辺三角形に近く、中央の稜線が明瞭に確認できる。

4も責金具の小片である。残存長2.4cm、幅6.5mmを測る。3よりも幅広で、本来は大型品の一部と考えられる。3と同様、断面形は扁平な二等辺三角形で、中央に稜線をもつ。

鑲付足金具 鑲付足金具は鞘の片面に取り付けられる佩用金具である。棒状品の一端を折り曲げて小環を固定する。この小環に紐を通し、腰帯と大刀を結ぶ。環と反対側の脚部を延ばし、途中で折り返す例が多い。

5は環を含めた全長3.4cm、環の最大径1.6cmを測る。全体に華奢な作りである。環は中実で、継ぎ目は明瞭である。脚の断面形は扁平な蒲鉾形を呈する。脚の折り返しは密着せずに開き、脚そのものも先細りになっていることから、未製品の可能性が高い。

倒卵形銅板 6は細長い倒卵形を呈する銅板で、長径3.0cm、最大幅1.3cm、厚さ1mmを測る。全体に緩やかに湾曲する。側面は丁寧な面取りされている。把頭または鞘尻金具の端部に取り付けられる板の可能性が高い。

露金具 露金具は、鳩目金具を通して把頭に結ぶ革紐の両端に取り付ける装飾金具である。通常は2個1対で使用される。

7は断面八角形を呈する中空品。全長2.3cmを測る。両側面に接合線が見え、蠟付けによる2枚合わせで作られたことがわかる。革紐に固定するための目釘穴等は認められない。

刀装具の年代 これらの刀装具のうち鳩目金具2点、責金具2点、倒卵形銅板、露金具は、飛鳥池工房で生じた産業廃棄物を濾過するための水溜付近で、多量の炭とともに出土した。廃棄物には富本銭やその鑄造関係品が含まれる。富本銭は『日本書紀』天武12年(683)条に記された「銅銭」に相当し(年報1999-II)、刀装具の年代も7世紀後葉に限定できる。

いっぽう、鑲付足金具は飛鳥池東方遺跡の流路SD010から出土した。この流路は『日本書紀』斉明2年(656)条に記された「狂心渠」に当てる説がある(年報1998-II)。鑲付足金具が出土したSD010の最下層からは、隆平永宝(延暦15年(796)初鑄)1点も出土している。しかし、7世紀中葉以降の土器とともに漆刷毛など飛鳥池工房関係

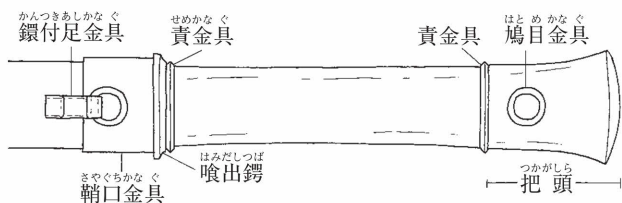


図49 方頭大刀の部分名称

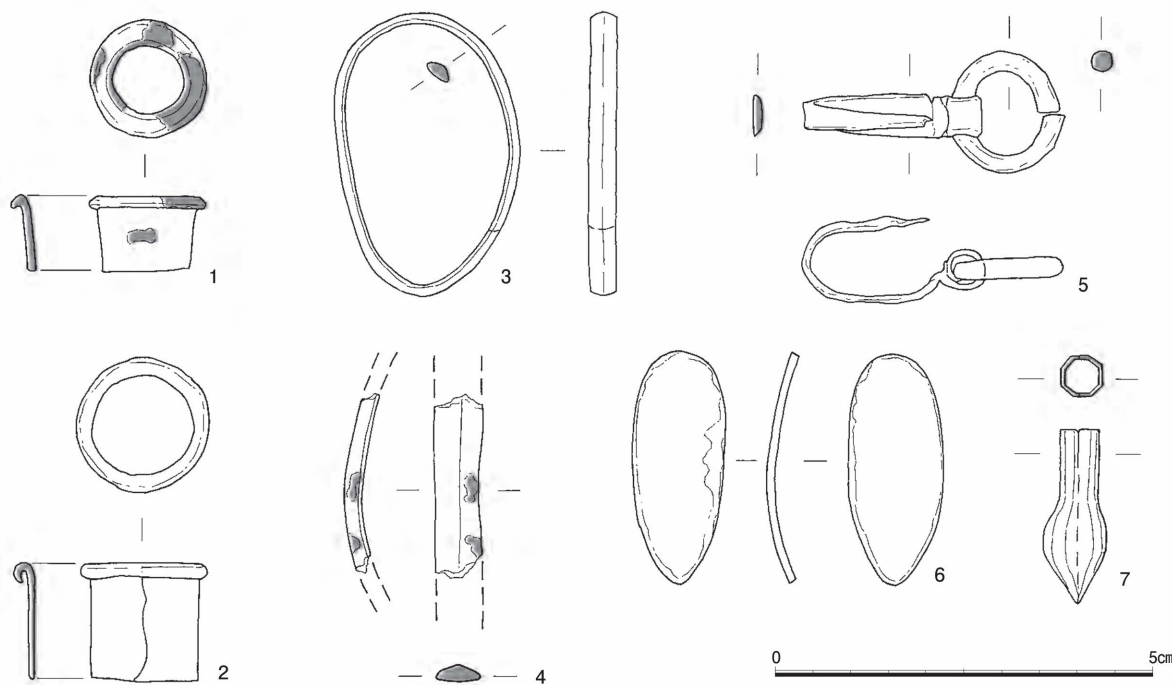


図50 飛鳥池遺跡出土刀装具 1:1

品も出土しており、西隣の飛鳥池遺跡で生じた廃棄物が投棄された可能性がある。つまり、鑲付足金具の年代も7世紀後半と筆者は考える。

刀装具の位置づけ それでは、これらの刀装具はいかなる大刀に装着されたのだろうか。

直径1.5cmを超える大型の鳩目金具は、埼玉県西原1号墳など初期の方頭大刀に類例がある(金井塚・渡辺1976)。また、中央に稜線をもつ責金具は、やはり初期の方頭大刀である宮城県亀井冢16号横穴墓例から認められる(松山町史編纂委員会編1980)。鑲付足金具は奈良県藤ノ木古墳の刀子(奈良県立橿原考古学研究所1993)、韓国・武寧王陵の刀子(大韓民国文化財管理局1974)に使用された例が最古で、先に触れた亀井冢16号墓出土の方頭大刀にも使用されている。飛鳥池東方遺跡例は脚部が極めて細く、全体が薄く作られており、鑲付足金具でももっとも新しい部類に属すと考えられる。

以上の検討から、鳩目金具、責金具、鑲付足金具は方頭大刀に使用された刀装具と考えられる。いっぽう、露金具は奈良県高松塚古墳の銀製露金具と類似している(橿原考古学研究所編1972)。本例は方頭大刀ではなく、山形足金具を持つ唐様大刀に属す可能性が高い。

まとめ ここまでの検討から、飛鳥池遺跡で方頭大刀が生産されていたことがあきらかになった。方頭大刀は畿内ではなく東北地方、関東地方、東海地方で出土例が多

いものの、製作地は飛鳥の官営工房にあり、中央政権から各地に配布されたことが確実にされた。

また、方頭大刀の出現年代をめぐっては、7世紀の前半とみる意見と7世紀の後半とする意見が対立する状況が続いている。飛鳥池遺跡出土の刀装具は新たな暦年代の定点として大きな役割が期待される。今後はこれらの刀装具がいかなる方頭大刀に装着されるものなのか、さらに詳細な型式学的検討を加える必要がある。

(豊島直博/文化庁)

参考文献

- 橿原考古学研究所編『壁画古墳高松塚』奈良県教育委員会・奈良県明日香村、1972。
- 金井塚良一・渡辺久生『西原古墳群－東松山市上唐子西原古墳群発掘調査報告書－』東松山市教育委員会、1976。
- 大韓民国文化財管理局『武寧王陵』三和出版社、1974。
- 奈良県立橿原考古学研究所『斑鳩藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書』、1993。
- 松山町史編纂委員会編『松山町史』、1980。